

## 2021年9月NHK北海道地方放送番組審議会

9月のNHK北海道地方放送番組審議会は、15日(水)、NHK札幌拠点放送局において、10人の委員が出席して開かれた。

会議は、委員長の司会により開会。札幌局長と北見局長からあいさつがあり、議事に入った。

議事はまず、2021年度後半期の国内放送番組の編成について編成主幹から説明があり、2022年度の番組改定についての意見を伺った。

続いて、北海道スペシャル「フェアブルのバトン おくやま親子の夏休み」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、10月の番組編成の説明と、放送番組モニター報告、視聴者意向報告があり、会議を終了した。

### (出席委員)

委員長	村田 博	((株)村田商店 代表取締役)
副委員長	桐生 宇優	(北雄ラッキー(株) 代表取締役社長)
委員	今村 江穂	(認定NPO法人子どもと文化のひろば ふれいおん・とがち 理事長)
	金山 準	(北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 准教授)
	倉本ひと恵	(オホーツクベーグル 代表)
	佐々木良榮	(デザイナー、(有)良栄・PLAN 代表取締役)
	成田 正夫	(ながぬま農業協同組合 代表理事組合長)
	西田 一博	(有限会社厚岸清掃社 代表取締役)
	西村 卓也	(北海道新聞社 論説主幹)
	船山 大介	(特定非営利活動法人 No Limits 理事長)

### (主な発言)

<北海道スペシャル「フェアブルのバトン おくやま親子の夏休み」

(総合 9月10日(金) 後8:00~8:43 北海道ブロック)について>

- 音楽の選曲もよく、図鑑作家の奥山久さんの思いを男性のナレーション、番組の進行を女性のナレーションと作り方にも変化があった。久さんと息子の英治さん、孫の恭さんが家族で楽しんでいる雰囲気も伝わってくる内容だった。恭さんはフェリーの中で、「今回は北海道の歩き方、おやじの歩き方、じいちゃんの歩き方を見ら

れたらうれしい」と言っており、とてもよい感性を持っていると感じた。英治さんが「3人で来るのなんて最初で最後だよ」と言ったときの久さんの何とも言えない表情が非常に印象的で、そういった話がオープンにできる、よい親子関係なのだと感じた。久さんが美瑛町で描いていた風景画はとてもすばらしかったのだが、その絵を見た英治さんが「さすが絵描きだな」と言っていて、久さんは画家でもあったのかと疑問に思った。久さんの経歴についてもっと紹介があればよかった。番組の後半で、英治さんが久さんに「死は怖くないか」という質問をしていたが、それに対する久さんの「死ぬなんて全然怖くないよ。だから毎日やりたいことをやってくわけ。やりたくないことはなるべくやらない。時間は全部自分のもの」「自然のよさを子どもでも大人でも教えてあげたい。それを通すために、人の言うことを聞きちゃいけない」ということばに大変感銘を受けた。久さんがこれまで作った図鑑は、このようなすてきな思いと経験から作られていたのだと感じ、自分の生き方に迷う人たちには、こういうふうに生きてよいのだと感じられる非常に奥深い話だったと思う。「フェアブルのバトン」というタイトルは、フェアブルから久さんへ、息子と孫へ、そして将来の子どもたちに引き継がれてほしいと思えるよいタイトルだった。新型コロナウイルスの影響で大変閉塞的な気分の中、一緒に夏休みの旅をしているような気分になった。

- 生き物や植物に魅せられた親子3代の旅に同行したような気分で、楽しく見る事ができた。教育熱心な親ではなかったという久さんだが、英治さんは父親の背中を見て学ぶことの多かった人生なのだろうと感じた。そして、自然の不思議にはとことんこだわるのに、食事には無頓着な様子は親近感のわく楽しい光景だった。親子で死について話す様子からは、その会話の内容の深さを感じたし、物の見方や考え方を共有できる親子関係はすばらしいと思った。死について語る久さんのことばが、英治さんや恭さんにも受け継がれていくのだと感じ、「フェアブルのバトン」というタイトルが強く印象づけられた。3世代がお互いを認めてリスペクトしている様子がとても新鮮で、久さんがフェアブルに勝る記録を打ち立てる日まで、この親子はお互いが愛情深くいられるのだろうと思えるほほえましいエンディングだった。子どもたちの共感力や、たくましく楽しく生きる力が身についていくお手本のようにも感じられて深く味わえる番組だった。
- 久さんが50年かけて120冊以上の本を作ったことは本当にすばらしく、83歳という年齢でもまだまだ現役で作られるのではないかと感じた。予備知識が何もなくても、手間暇をかけながらしっかり自分の目で見て感じたものを落として作っていくという久さんの図鑑作りの大変さも感じられた。また、移動中の駐車場などでも、いろいろな植物や昆虫などにすぐ目が向き脱線してしまう奥山親子の行動が自由すぎて、

その姿を追うスタッフも大変だっただろうと思った。それぞれの行動を追い過ぎてバラバラな感じもあったが、親子の仲のよさ、この3人の道中の楽しさはしっかりと伝わってきた。ただ、英治さんが久さんの背中を見て育ち、自身も自然教育の指導者となっていたので、自然体験施設で子どもたちに教えている姿をもう少し見せてもらいたかった。また、孫の恭さんは、フェリーの中で「おやじとじいちゃんの北海道の歩き方を見たい」と話していたので、その歩き方を見てどう感じたのかということにも触れてもらえれば、より深く見ることができたのではないか。

- 音楽やナレーションが軽妙で、全体として落ち着いて楽しく見ることができた。好きなことを親が追求して、それに共感する子ども、さらには孫という在り方にとっても好感を覚えた。好きなものを親が子どもに押し付けるわけでもなく、子どものほうも親に無関心なわけでもない。互いの生き方に対して敬意を持ちながら接している点は、ひとつの理想的な親子関係の在り方かもしれないと感じた。北海道に住む者にとっては見慣れている動植物が、奥山さんたちの目を通すことで改めて新鮮に感じられた。だが、描かれているのが完全に男性の関係だけであるというのが気になった。好きなことを一緒に追求して楽しむ3世代の父と息子と孫は、見ていてうらやましいと思うが、彼らの配偶者はその生き方をどのように見て感じて、関わっているのかをもう少し知りたかった。「ファールバットのバトン」というタイトルだが、バトンに関わっているのは、本当にこの3人だけなのか。好きなことを自由に追求するのは男性で、それを見えないところでサポートするのが女性という構図に見えなくもないので、父と息子、孫以外の視点がもう少し欲しかった。
- 音楽もナレーションもほのぼのとしていて、とても楽しく見ることができた。道民ではない3人がどのような視点で自然観察をするのかということに興味があった。興味の対象が目の前にあれば観察をするという、マイペースで芯を持った生き様はとてもすばらしく、知りたかったこと、見たかったものを実際に目にすることがいかに大切かということを教えられた。3人の食事風景はとてもダイナミックで無頓着だったが、グルメ番組やありきたりの北海道観光地巡りではない、こんな旅を楽しめたら人生を何倍にも楽しめるのではないかと思わずにはいられないものだった。好きなことを仕事にしているとはいえ、誰よりも知識を深めることは並大抵の努力ではなかったと思う。知識人ぶらずにただありのままを観察し続けることの大切さや、映像から伝わる久さんの人柄は、とても心温まるものだった。どの年代の方が見ても、心揺さぶられる番組だったのではないか。北海道の自然を当たり前のもと思ってしまいがちだが、この番組によって知らないことが多いのだということに気づかされた。これからも自然の不思議や美しさを改めて見たいと思える時間になった。また、それぞれの配偶者は3人をどのように支えているのか、今回の取材はどのような経緯による

ものだったのかということも気になった。

- 3人の行動がバラバラで話が分からなくなる場面があったが、女性のナレーションが上手にまとめており分かりやすかった。また、久さんのことばを男性のアナウンサーが話すという演出もとてもよかった。オムサロ原生花園で初めて目にする草を撮影して、その草についての調べ方を話している姿から、仕事への誇りをかいま見ることができた。「日本の野生植物は5000以上ある」という話もしており、それだけの時間と労力を積み重ねてきたことが想像できて印象に残った。英治さんが久さんのすごさについて語るシーンからも、久さんが行ってきたことのすごさが伝わり、よい親子関係が描かれていた。ただ、「フェアブルのバトン」というタイトルに関しては、久さんの「自分に師匠は特にいないけれども、影響を受けたのはフェアブルだ」ということばがあっただけだった。また、久さんは50年で120冊以上の本を作ったということだったので、久さんの作品やこれまでの功績の紹介もあればよかったと思う。なぜ3人の北海道旅行を取り上げたのか疑問に残ったが、「バトン」という意味では家族のきずなの強さを感じて、自然への敬愛や家族のきずなについていろいろと考えさせられた。こつこつと努力を積み重ねてきた久さんの生き方に非常に感銘を受けて、尊敬の念がこみあげる大変よい番組だった。
- 番組を制作する意図がよく分からず、何を受け取ればよいのか分からずに終わってしまった。初めて訪れる土地の生き物に関してとても知識が豊富だと思ったが、ふだんの生活の様子を知りたいと思った。親子3代で死について深い議論をしている様子からは、こうした旅の途中でなければこのような会話はできないのかもしれないと感じた。タイトルの「フェアブルのバトン」について、バトンが親から子へ、そして孫へという流れは分かるのだが、一番最初に久さんがフェアブルに受けた影響が何だったのか分かりにくかった。また、図鑑作家、ナチュラリスト、靴屋といった3人の職業から考えると、BGMのメッセージはやや楽観的過ぎると思う。

(NHK側)

自分で見たものしか執筆しないという久さんの姿勢がフェアブルに通じると見立て、自然に子や孫に受け継がれていくことを「バトン」と表現した。

- タイトルの「フェアブル」から専門的な内容なのかと思ったが、植物や昆虫などに詳しくない人にとっても入り込みやすい内容だった。草花や昆虫を楽しむ様子が描かれており、無限に楽しめるものだとことに気づかされた。親子3世代のやり取りが大変興味深く、冒頭のやり取りはよい関係性を持った3人だから成り立っていると

感じた。全体的にはほのぼのとした展開だったが、「親子とは」「生きるとは」といったメッセージがちりばめられていたように思う。久さんは、夕食の会話で「好きなこと以外はやらない」と話していて、こういう生き方があってもいいのだと感じた。久さんは、自分のためにやりたいことを突き詰めてきたように思えるが、結果的に英治さんや恭さんは親の背中を見ながら、自分が選んだ道を自立して生きている。親の考え方を押し付ける傾向が多く感じられる世の中で、このような子育ての方法もあるのだと思った。また、テントを使わないキャンプをしていたようだが、どのように寝泊まりしていたのか気になった。

- 好きな仕事をとことんやってみたいと思わせるとてもすてきな番組だった。久さんがパーキングエリアにあるフキをそのまま食べていて衝撃的だったが、その野生味に引き込まれた。久さんが描くスケッチにも感動したが、彼の人柄がにじみ出ていてなるほどと思える場面だった。番組では、夕食のシーンで缶詰を火にかけていたが、火にかけると内側のコーティング剤が溶け出して食品に移ってしまう缶詰があった時代もあるので、視聴者に対して間違いを与えないよう気をつけてほしい。3人の夕食のシーンはとてもよい場面だったので、食品の安全性に対する認識をしっかり持ったうえで制作してもらいたい。
- 北海道には原生花園がいくつかあるが、なぜ紋別市のオムサロ原生花園を選択したのか分からなかった。久さんを見ていると、単に自然が好き、草花が好き、昆虫が好きということではなく、自分で見て感じたものを図鑑にしてくれかに知らせることが喜びにつながり、自由に仕事ができるという結果につながっているのではないかと感じた。タイトルの「バトン」ということばには、自然の豊かさをつなげること、親の背中を見ていく世代のことといった、さまざまな意味が込められていると感じた。全体を通して大変軽妙で、3人の動きに合った音楽の選択とナレーションはとてもよいと感じた。ただ、缶詰のふたを開けずに直接火にかけた場合、開けた瞬間に水分が飛び出して危険なので、視聴者に向けた注意があればよいと思った。

(NHK側)

番組では缶詰を直接火にかけた映像を放送しているので、再放送のときは注意喚起をしたい。

<放送番組一般について>

- 8月11日(水)の目撃! にっぽん選「日本一静かで 笑顔あふれるカフェ」(総合 前6:10~6:45)を見た。スタッフの8割が聴覚障がい者というカフェで、スタッフリー

ダーの大塚絵梨さんは聞こえない人も聞こえる人も一緒に接客の仕事をしたという夢を持っていた。大塚さんの熱意は、聴覚障がいのある人たちでも働けるということを証明し会社に認めさせようというもので、「みんなが頑張った」と言っていたことがとても印象的だった。常連客もスタッフの明るく受け答えする姿、人懐っこさに好印象を持ち、ことばはなくて静かだが、手話や筆談でいろいろな会話が交わされている様子にはぎやかに見えた。話すということだけがことばではないのだと感じ、とても印象的だった。常連客の中には、スタッフの仕事ぶりを見ると自分も頑張らなければならないと思えるという人がいて、来店した人にも力を与えてくれているお店だということが伝わってきた。また、大塚さんは「みなさんがくつろげる場所を作りたい」という思いでお客さんと交流していた。会社の理念にあるように、人種・性別、障がいの有無に関わらず、多くの人たちが安らげる場所になっていると思える、とても感動できる番組だった。

- 8月21日(土)の「今夜も生でさだまさし～北の国から2021夏・安平～」(総合後 11:50～前 1:20)を見た。北海道胆振東部地震から3年というタイミングでの生放送だった。さださんは3年前のこの時期に札幌市でコンサートがあり、災害ボランティアを応援する意味で避難所を回ってたくさんの方と話したということ伝えていた。1時間半の番組だったが、地元である安平町の方たちのはがきも多く読まれ、さださんが避難所を回ってくれて勇気づけられたという話も多かった。SNSでの誹謗中傷など、社会で大きな問題になっている点についてもいろいろと述べており、「自分がされて嫌なことは人にしない」ということを、さださん自身のことばで話していたのが非常に印象的だった。さださんは年齢に関係なく、幅広い世代に支持されていることが感じられた。数々の出会いをしてきたさださん本人の魅力がそのまま番組の魅力となっていたと思う。
- 9月1日(水)の福島をずっと見ているTV(96)「つながり人形“モッコ”が見たもの」(Eテレ 後 10:00～10:44)を見た。東京オリンピック・パラリンピックの公式文化プログラムで、被災地の復興がどのような形で世界に発信されていくのか興味深く視聴した。人形劇師の沢則行さんが人形制作を指揮し、番組のMCであるクリエイティブディレクターの箭内道彦さんが全長10メートルの巨大人形“モッコ”をみんなで力を合わせて動かそうというプロジェクトだった。東北の復興のためにこのチャンスを最大限に生かしたいと願っていたが、新型コロナウイルスの影響で東京オリンピック・パラリンピックが延期になってしまったこともあり、「招致のためだけのお題目にさせたくない」という思いが、プロジェクトを通じて被災者を励ましたいという思いとも重なり、強い意気込みが感じられた。巨大人形の操り方だけではなく、子どもたちの夢や希望、復興に向けて歩むすべての人の思いをつなげることを意図し

ているということが、モッコの物語の作り手である又吉直樹さんとの対話からも伝わってきた。モッコの旅に立ち会った東北の人たちには、見る人それぞれの思いがあって感動しているようだった。その様子を見て、文化・芸術の力は侮れないと再確認することができた。表面的には復興は済んだかもしれないが、心の復興には手がつけられていないという現状を、東北復興を掲げたオリンピックが終わっても続けて発信していくべきだと感じた。箭内さんのメッセージを、多くの人が忘れずに心に留めてほしいと改めて思った。

- 9月10日(金)の「ほっとニュース道北・オホーツクスペシャル」(総合 後 6:45～7:00 旭川単・北見単)を見た。15分という時間の中で道北とオホーツクの話が幅広く伝えられていた。道北ローカルのニュースを見ることはとても新鮮に感じられた。道北の話題もオホーツクの話も両方見ることができて満足感があつたので、今後も見る機会があるとよいと思った。
- 9月10日(金)の北海道道「新型コロナ第5波 デルタ株との闘い」を見た。冒頭に人工呼吸器ECMOを使用した治療の様子が映っており、非常に衝撃的だった。医療現場や保健所のひっ迫した状態がよく伝わり、緩んでしまっていた気持ちを引き締められた視聴者も多いのではないかと感じた。街頭インタビューには誰もが思う疑問が集約されていて、それに対する札幌医科大学の横田伸一教授の答えは明確な答えだけではないが、今言えることを最大限に話していると感じた。日本はワクチン接種を推奨しているが、ワクチンを接種しないことが悪であるかのような表現はしてほしくないと思った。いろいろな不安や思いがあると思うので、ワクチンなどについて取り上げるときはデータや科学的根拠に基づく取材をした番組を制作してほしい。短い時間の中では警鐘を鳴らすといった内容にとどまらざるを得ないとは思いますが、「北海道道」ではもう少し違う視点でもよかったのではないかと感じた。
- デルタ株を中心とする第5波の特徴を分かりやすく、バランスよく、危機感を持って伝えていたのではないかと感じた。ワクチンについて、SNSやインターネットなどで不確かな情報がかかり出回っているように感じる中で、私たちが抱きがちな典型的な疑問に横田教授が丁寧に答えていた。ECMOを用いた重症患者の治療現場の映像は刺激が強かったため、放送することに賛否もあると思うが、現場の切迫感やひっ迫した状況がよく伝わってきた。壮絶な現場の医療崩壊ということばの重みを改めて感じられたので、伝える意味はとて大きいと感じた。感染者数と重症者数は毎日伝えられるが、数字だけでは分からない情報がこの番組では多角的に伝えられていたため、まさに今求められている内容だったと思う。

- E C M Oを使用する現場の映像は衝撃的で、視聴者に警鐘を鳴らす内容だったと思う。今回の番組は若い世代における感染状況はどうかという話がテーマのひとつだったと思うので、北海道内の重症者数のうち、若い人の比率が増えているのならば、きちんと数字を提示するべきだったと思う。横田教授の解説は、分からないことは分からない、難しいことは難しいと言っており、理論的で信憑性が高いと感じた。男性MCは、芸術的な話や芸能関係といったものに関してのコメントは本当にすばらしいのだが、社会問題になるとどうしても空回りしてしまう印象だ。熱い気持ちとともにしっかりと伝えてほしい。

(NHK側)

E C M O治療の現場の映像はまさに伝えたいことであり、放送した意味があったと思う。この回の「北海道道」は当初別のテーマだったが、緊急事態宣言が延長されることで急きょ内容を差し替えた。もう少し違う視点でというご指摘についても検討する。

- 「ひるナマ！北海道」を見ている。ほかの地域情報番組やニュース番組では、テレビの番組表にアナウンサーやリポーター、ゲストの名前が出ているが、「ひるナマ!北海道」は名前が出ていない。番組情報は参考になるので、出したほうがよいのではないか。
- 9月11日(土)のNHKスペシャル「9. 11 閉ざされた真相～遺族と国家の20年～」を見た。9. 11から20年という区切りであり、実行犯の背後でアメリカの同盟国のサウジアラビア政府が支援していたのではないかというテーマは、もし真実であれば歴史が塗り替わるであろう重要なものだった。番組では、サウジアラビアは湾岸戦争以降、非常に強い反米感情を持っており、湾岸戦争のために聖なる土地に異教徒の米軍が駐留したことに対する怒りは大変強かったと伝えていた。9. 11のテロは宗教戦争なのかもしれないということにもつながるテーマだと思った。F B Iの元捜査官へも深く取材しており、遺族の姿を通して国家関係に関わる問題を追いかけた内容で、この問題は今も未解決といえるのだと感じた。ただ、実行犯の背後にサウジアラビア政府の関与があったとしても、それは9. 11以降の出来事の意味を変えるまでの問題になる話なのかが分からず疑問が残った。今後のアフガニスタン情勢にも関わる大きなテーマだと思うので継続して取材してほしい。
- 東京オリンピック・パラリンピックの開会式と閉会式について。オリンピックの開会式に手話通訳がなく問題視され、関係団体などからNHKに要望があったと聞いて



いる。その後、オリンピックの閉会式、パラリンピックの開会式・閉会式には手話通訳があり、期待以上に応えてくれたと思う。手話は地域差が大きく、年代によって違いもある。また、中途失聴者の中には手話が分からない方もいる。今回の取り組みを踏まえて、今後も情報アクセシビリティの究極型を目指してほしい。

- 東京オリンピック・パラリンピックについて。通常のニュースなど競技以外の放送を求める人も一定数いたかと思うが、自国開催でふだん目にすることのないさまざまなスポーツを見ることができてとてもよかった。特に、パラリンピックに関しては現場に立つだけでも大変な方々が、周囲の支えがあって競技の場に立っている。鍛錬を重ねて結果を出す姿に感動した。

NHK札幌拠点放送局  
番組審議会事務局